

9月から10月にかけては香りの季節だった。風の弱い日にそこかしこのアベリアの植え込みの側を通るとほんわりとした香りが身を包みこんでくる。かすかなベニの香りだ。9月の初め頃からは、クズの側を通ると甘い香りの予感がした。そして10月には、これはもう夜目にもはっきりとその存在を主張するようなキンモクセイの香りが漂ってきた。

クズ マメ科クズ属 花期；7~9月（当地では9月）

クズの香りで思い出すのはブリリアができる前、タマタイムの辺の土地も高台になっていて、その間の遊歩道は舗装されていず、丘の上の道のようなだった。その道の両側からクズがはびこり、クズの花が通行人に踏みしだかれて、あたり一面洋酒に酔うような甘い香りに包まれていた事だ。



(上) フェンスにからまるクズ

(左) クズの花 (9月17日)

今年は9月に入って、ブリリア北側の遊歩道のフェンスにからまったクズからほんのり甘い香りの予感が漂ってきた。花は房の下側から少し咲き出したばかりのためか、甘い香りというより、まだ清潔な香りとてもいおうか。少し経って花房いっぱい咲く頃には、昔のような甘い香りを放つようになるのだろうか。そんな期待も込めて、とりあえずまだ咲き出したばかりの時期の写真を撮っておこうとカメラを向けたのは9月17日、掲載した写真はその時のもの。

クズはわが団地の法面にも生えてはいたが、草刈の後に生えてきたものでまだ伸びきっていなかった。キンラン保護地は草刈りが入っていないために、かなり伸びて斜面を覆っていたが花は付けていなかった。半日陰のためかどうか理由は分からない。花が確認されたのはブリリア北側の遊歩道フェンスとタマタイム南西部の空地のあたりだった。

さてそろそろかなと半分期待を込めて待っていたのだが、10月に入ってふと気付くと、すっかり刈り込まれていた。見て回るとタマタイム敷地の周辺はきれいに刈り込まれ、都道側（旧わんにゃん跡地）には都市機構の「分譲予定地」の看板が立った。ここのタマタイムの営業は15年契約で、あと残すところ2年弱くらいのはず、この土地もまた数年のうちには工事が始まり大きく変わっていくのだろう。

植物のクズの紹介が後になってしまった。

クズはマメ科の多年生のつる草。万葉の昔から秋の七草に数えられたり、その根からとれる葛粉は高級和菓子の原料になったり、漢方では葛根湯(かっこんとう)として感冒薬に使われたり、クズの茎の繊維から織られた葛布(くずふ)は上代では一般庶民の衣料として使われたり、はては葉は牛や馬の飼料にされるなど、身近で親しみのある、そして庶民の生活には切っても切れない有用な植物であった。

ところがつるは十メートル以上に伸び、斜面と問わず、他の地物や植物、そして高木に巻き付き、覆いつくすきわめて生命力旺盛な植物である。手入れが行き届かず放置されると、低木を覆い隠してクズの低木のごとくに、高木を覆いつくすとまるでクズの木のような風景となってしまうのは、どなたもご覧になっていると思う。



(上・左) 法面にはびこるクズ



『緑の侵入者たち』という本には面白いエピソードが紹介されている。1800年代後半、クズは適応性に優れ、非常に丈夫で、しかも成長が早い点がかわれ、アメリカに牛馬の飼料用や砂防用として、日本から積極的に導入された。一時は東洋からの救世主のようにもてはやされたという。ところがその持ち前の適応性と、猛烈な繁殖力をしだいに発揮しはじめ。またたく間に広がり、林や畑を覆

い尽くし農作物を枯死させたりして、しだいに困った存在となり、北米ではとうとう悪名の高さではワーストワンの地位を占めるまでにもなってしまったという。

我々の周辺ではどこでもそれなりの手入れ・刈り込みがされているのでそれほどでもないが、田舎などで放置された場所では、猛威をふるっている風景がよく見られる。いや、それだけでなく、クズは草ではなく木なのではないかと疑いたくなる風景もみられる。右は、以前田舎で撮った大木に巻きつくクズの写真。クズはもともと茎の基部(根に近い部分)は木質化する植物であるが、放置されると全体がこんなにも太い木になってしまう。これではとても草本には見えない。



(右) 大木に巻きつくクズ、共に直径15センチ位。2003年 会津

身近で愛される存在から、ある時は猛威をふるう暴君にもなる、クズはなかなかユニークな植物である。(クズは草本、つまり草の一種です) (参考; ,)

ハギ マメ科ハギ属 花期; 7~10月

ハギ(萩)とはマメ科ハギ属の総称。万葉の時代から秋の七草として親しまれている。がハギは木本に分類されている。同じマメ科なのに、クズは草、ハギは木、落葉低木である。



ミヤギノハギ(北側階段下、10月21日)

ハギの魅力は何なのだろう。そんなに華やかな花でもないし、少し離れれば見落としてしまいそうにしなだれた枝の先にひかえめに紫紅色の蝶型の花を付けるだけ。しかし、「ハギのよさは、なんとも寂しげなそのたたずまいであろう。迫力のないしなやかな枝、紅白に咲き分けた可憐な花、雨に打たれ、朝露に濡れる・・・月影にゆれ動くハギも、散り敷くこぼれハギの風情にも、人びとは心を向けた。侘び、さびの境地をこの花に求めた」とべた褒めに記すのは『花の風物誌』である。

ハギは美術・工芸品に取り上げられただけでなく、人工造林地や砂防用にも植えられ、家畜の飼料にされ、さらに新芽は萩茶として飲まれ、枝は箒にされたり、小屋の屋根ふきにされたり、さらに花は萩染めの染料にされたりと、昔からなんとも実利性に富んだ植物なのである。「おはぎ」の由来は、ハギの実を粉にして栗と混ぜて餅にして食べたところからきているなんて、考えたこともなかった。

こんなにも親しまれ、実利性に富んだ植物と書くと、あのクズにそっくりではないか。でもここからが違う。クズが繁殖力旺盛にテリトリーを広げていったのに反して、ハギはやせた土地でもよく育つ生命力のある植物のようだが、法面に生えている状態を見れば、あそこに1本、こちらに1本、忘れられた植物のように、控え目に花をつけているだけ。茎を触れば確かに木質化しているが、年々太くなって伸びるようなこともなく、根元から新しい芽が毎年出てくる。茎はまっすぐに伸びず先端はしだれる。このようにハギは落葉低木といっても、「木」とは言い難い面もある。

初めに「ハギはマメ科ハギ属の総称」と書いたが、わが団地のハギの種類は何だろうか。これまでは同じ種類でまとめてもよいのかと思っていたが、葉の形を見れば微妙に異なる。

8号棟北側の階段下右のハギ(写真上)。葉は長楕円で先がとがっている。

10号棟北側法面のハギ(下左右);葉が少し丸みを帯び、先がへこんでいる(ハート形)葉もある。10月下旬には花がすでに終りみが膨らんできていた。こちらはヤマハギ。(あるいはマルバハギ?)



ヤマハギ(あるいはマルバハギ?)(左:8月26日、右:10月28日)

1号棟北側駐車場と北進入路の間に咲いていたハギは葉が少し丸みを帯びているのでヤマハギ。しかし、11月に入るのに花をつけていた。(右)ヤマハギ 11月1日

花期について図鑑には、ヤマハギは7~9月、ミヤギノハギ、マルバハギは8~10月と記されていた。最後のヤマハギはこの点で疑問がのこる。

その年の気候や生えている場所や条件、あるいは個体差もあると思われるが、ハギの判定はなかなか難しい。(参考; , , , HP)



キンモクセイ モクセイ科モクセイ属 花期;9~10月(当地では10月前半)

10月に入って、夜旧わんにゃん跡地の側を通ると、キンモクセイの香りが漂ってきた。フェンスを覗きこんでも目につくのは夾竹桃の花ばかり。夜の闇の中ではどこにキンモクセイが植えてあるのかわからなかったが、昼間探してみると、フェンス沿いに何本も植えられているのが分かった。これまで気付かなかったが獣の匂いを消そうと植えてあったのかもしれない。

我が団地の中にも各棟の周辺に合計20本以上のキンモクセイが植えられている。

このキンモクセイはモクセイ科の仲間の中でもっとも芳香が強く、春のジンチョウゲ、夏のクチナシとともに三香木に数えられて人気のある花木である。橙黄色の花は葉の付け根に塊のように付いているが、拡大した写真で見ると、一つ一つの花は直径4~5ミリの小さな十字型の4弁の花のように見える。しかし注意すべき点は、この花は合弁花に分類されている事。花を手にとってみると、すっぽりと抜け

落ちた花弁はバラバラになることなく、花の付け根がくっ付いている事が分かる。

キンモクセイは雌雄異株で、日本では結実しない雄株が広く栽培されている。



6号棟前のキンモクセイ。 10月8日

キンモクセイの花は花弁が厚く、まるで手芸で付けられた小さな花の集団に見える。觀賞する花というより、香りを楽しむ花である。ではこの香りをどう表現すればよいか。図鑑にはただ“強い芳香”と書いてあるが、これでは分からない。“強い甘さの香り”、まだだめかな？それでは“湿り気のあるまわりつくような甘い香り”、もっと変かな？ある本には、「臆(ろう)たけた婦人のほほえみ」と表現されていた。なるほどな、この辺が言い得て妙な表現かもしれない。

もう少しエピソードを探してホームページを検索してみる。

「金木犀といえば、その甘い香りゆえ、ポプリや香水に利用されることも多いが、お酒やお茶、そのほか食べ物へも活用されている。「桂花陳酒」はワインに金木犀のつぼみを漬けて造られるお酒だが、これは、唐の玄宗皇帝の愛妃、楊貴妃が愛したお酒としても知られてる」とのこと。

「中国の美女は、男性と会う前にはキンモクセイの入ったお酒を口に含ませるのが習慣でした。女性が話すとき、吐息を花の香りにして、まさに男性を“陶醉”させて、魅了した」そうです。世の男たちよご用心あれ。
(参考; , , , HP)

ムラサキシキブ クマツヅラ科ムラサキシキブ属 花期;6~8月,実;10~11月

わが団地のムラサキシキブは8~9号棟北側法面に生えている。花は見損なってしまったが、紫色の美しい実は写真に撮ることができた。落葉低木で高さ3メートルほどになる木である。

「裸の枝に宝石をちりばめたような濃い艶やかな紫は、やわらかい光に映えてひととき美しい」とその美しさを的確に表現するのは『花の風物誌』である。これに続けて、「その実の美しさに魅せられた風流人か粹人が、王朝の才媛紫式部の名を借りて美化したのがその名前・高貴な魅力に誘い込まれそう」

とロマンチックな説を唱え、自身その説に酔っているような雰囲気。いずれにせよ『源氏物語』の作者、紫式部とは関係はないらしいのは残念であるが、別の本には、「江戸時代に実紫(みむらさき)の名前で流通していたが、商売上、紫式部のほうが美しいということでこの美飾名が広がり、人気が出たと言われている」『大人の園芸 庭木・花木・果樹』と記されている。後者の方が事情を語っているようだ。本当にこの紫色の粒粒の美しい実をみつけるとおもわず笑みがこぼれますね。



ムラサキシキブ (9号棟北側、10月7日)

先日田舎へ行った折に、同じ紫色の実をつけてはいるが高い木ではなく、地面付近に枝を伸ばし広がっている小低木があった。濃い紫の実をいっぱいにつけて華やかな感じだった。こちらはコムラサキである。観賞用に庭木などとして栽培されているはこのコムラサキの方が多いとの事。



コムラサキ (磐梯町、10月23日)

追記；ムラサキシキブは4号棟西側から南側にかけても3本。コムラサキは5号棟西側の生け垣の中に植えてあった。すべてが住棟の後ろ側に植えてある。なぜかは分からない。(参考； , ,)

ハナカタバミ (オキザリス・ポーウィー)

南アフリカ原産で、日当たりのよい草むらや道端に生える多年草。江戸時代に観賞用に輸入されたものが野生化したもの。当地では、バス停裏、緑化ブロックの下部に、毎年秋に美しい花を咲かせている。これは東駐車場の増設に伴い作られた緑化ブロックに、ツツジの苗・土とともに他から運ばれて広がったもの。

葉の間から花茎を伸ばし、茎先からたくさん枝が出て、その先に1個ずつ濃い桃色の花をつける。花径は3～5センチと、野草のカタバミやムラサキカタバミと比べてもかなり



大きい。日当たりを好む花なので、日が当たると開き、曇ったり日陰になったりすると花を閉じてしまう。

(上) 9月27日。垂れてるのはつぼみ。

(下) 9月30日。三つ葉の先が少しへこんでいるのがカタバミ(オキザリス)の特徴。

時には一斉草取りに草とともにむしり取られるが、根が残ってまた生えてくる。最近では緑化ブロックだけでなく、その手前の側溝にも広がってきている。場違いな花かもしれないが、

美しい花なのであまり目くじらを立てないで、咲かせておいてあげたいと思う。(参考; , , HP)

ヒガンバナ (彼岸花、曼珠沙華) ヒガンバナ科 花期; 9月

花の名は秋の彼岸の頃に花が咲くことによる。当地では9月16日頃に咲き始め、9月24日頃は最盛期だったが、9月30日にはほとんど花は終わって萎れていた。花の見どころは短いので、この日付を覚えておいて見に行かないと、いっぱい咲いている様子は見られない。

(右) 満開のヒガンバナ (9月24日)

一般に田のあぜや土手などに群生しているが、当地の東法面の彼岸花は人の手で植えら



れたもの。分布は日本全土に広がっているが、もともと日本に自生していたものではなく、古い時代に中国から渡来した帰化植物と考えられている。

ところで花の根元を見ていただくと分かるように葉が付いていない。葉は花が終わって、晩秋に伸びはじめ、越冬して翌年春に枯れる。写真はつぼみ、満開、萎れ、葉の状態。



つぼみ(9月16日)



満開(9月24日)



萎れ(9月30日)



葉(11月1日)

毎度『花の風物誌』を引くが、この花を「地底から炎を吹き出したかのように真赤に燃えている。清明な秋空と対照的に魅惑的ではあるが、なんとなく妖気が漂っているようで、昔から忌み嫌われてきた」と記している。この花の雰囲気を的確に表現していると思う。確かにこの花を花瓶にさして観賞する気にはなれない。

また、『日本植物方言集』には、ヒガンバナについて全国で約400種類もの方言や異名が記されているという。その中には、妖しげな情念が投影されているような呼び名が多いとの事。ヒガンバナは不思議と墓地に多いこともあり、ハカバナ、シビレバナ、ユウレイバナ、・・ジゴクバナ、ソーシキバナなど、“あの世”にまつわる呼び名がずらりと並んでいると記されている。

『花の風物誌』にはこの他さまざまな話が紹介されているので、ご興味ございましたら図書館などでこの本を探してみてください。

(参考; ,)

イヌタデ(赤まんま) タデ科タデ属 花期:6~10月



法面にも道端にもごく普通に生えているありふれた野草であるが、どこか親しみがある。茎の先に赤く小さな粒粒がいっぱいついて、あるかなしかの風に揺れている。この赤い粒粒を赤飯にみたくて子供たちがままごとで遊んだので“赤まんま”の愛称で呼ばれるというが、今の子供たちはままごと遊びなどするのだろうか？あるいは大人たちが子供のころを思い浮かべてのノスタルジーかもしれない。

(写真) イヌタデ(北法面、9月27日)

花は米粒大で2~2.5ミリの大きさ、花弁はなく丸く包んでいるのがく。これが5弁の花のように開くが、いつまでも蕾のように閉じ、実とともに落ちるまで離れず、色は変わらない。何度か見に行ったが、いつも丸い蕾のまま、開く様子を見られなかった。

なお、和名の“イヌタデ”は、葉に辛味がなく役に立たないという意味で“イヌ”が付いている。一年草である。(参考; ,)



エノコログサ イネ科エノコログサ属 花期:8~11月



ちょっとした草むらにも道端にも普通に生えている一年草。ユーラシア大陸原産で、農耕伝来とともに大陸から入った古い帰化植物といわれる。五穀のひとつアワ(粟)の祖先と考えられている。

茎の先に少したれ気味のむくむくとした穂のイメージから子犬の尾を連想して“狗尾草”、また猫がよくたわむれることから“ネコジャラシ”とも呼ばれる。英名は“緑の狐のしっぽ”。

(写真) キンエノコログサ。緑の穂のエノコログサも混じる。(9月27日)

穂の色から、緑の穂はエノコログサ、少し金色がかかったキンエノコログサ、紫褐色がかかったムラサキエノコログサがある。エノコログサの群生には、同一種類の群生だけでなく、2種類、あるいは3種類混じって生えている場合も見られる。（参考； ， ）



エノコログサ



キンエノコログサ、



ムラサキエノコログサ

イタドリ タデ科タデ属 花期；7～10月

日当たりのよい荒地や斜面、道端などに生える多年草。多年草だから毎年同じ場所に生えてくる。当地では10号棟西側の遊歩道にかかる陸橋の両端に、茎が赤く、葉が大きく葉脈に添って赤みがさしている、いかにも手ごわそうな草が生えてくる。この場所市の管轄だが、陸橋の手前は一斉草取りで有志が手入れしているので綺麗になっているが、写真で見るように、陸橋の反対側は放置されたまま。ここにマツヨイグサやススキ、そしてイタドリなどが生えている。植物観察には格好のポイントの一つ。

花期が7月からだからもっと早く咲いていたのかもしれないが、うっかりして気付いたのが9月17日。台風が去った後に見てまわって気付いた。葉は虫が食い、風雨に痛めつけられみずぼらしい風情だった。



イタドリ 9月17日

ところで『草木花歳時記 夏』に気になる記事があった。「子どもの頃には、若い茎をスカンポとよんで皮をむいて食べた」との事。“スカンポ”ってスイバの事ではなかったのか。田舎では“スカナ”と書いていたが、私も子供の頃食べた事がある。しかし、いかにもゴツツイ感じのイタドリとは感じが全然ちがう。図鑑で見るとスイバは確かにあり、同じタデ科の植物で「茎に酸味があって食べられる」、そしてスイバの別名として“スカンポ”と記されていた。イタドリがスカンポと呼ばれる場合があるかどうか分からないが、いずれも茎に酸味があり食べられるらしい。

もう一つの話は『緑の侵入者たち』に載っていた話。「イタドリは初め観賞用としてヨーロッパ、北アメリカ、ニュージーランドなどへ輸出され、庭園に植えられ、可愛がられていた。ところが今では野生化して、完全な帰化状態になっている。わが国と気候的条件が似ている地方では、きわめて旺盛な生育ぶり、人家付近の道端や荒れ地、鉄道沿線、河岸、堤防などでは、他の植物が入りこむすきがないほど密生している」との事。

近く海外へ行かれる予定の方がおられましたら、クズやイタドリの繁茂状態に気をとめて見てきてください。 (参考; , ,)

【 植物の実の状態 】



ハナミズキ(9月27日)



イチョウ(10月8日)



カキ (9月27日)



コブシ・落果 (9月16日)



フヨウ (10月14日)



ゲンノショウコ (10月14日)

(トピックス)

雨後のキノコ

9月16日、台風18号は東海、関東、東北南部へと縦断して通過した。台風の通過後、法面を見て回ったところ、東法面にキノコがびっしり生えていた。キノコは植物ではなく菌類ですが、キノコの事は分からないので、このような現象があった事だけ報告します。



なお、10月16日、台風26号通過後にはこの現象は見られなかった。

【参考書】

- 『大人の園芸 庭木・花木・果樹』 濱野周泰監修 小学館
- 『花の風物誌』 釜江正巳著 八坂書房
- 『山溪ハンディ図鑑1 野に咲く花』 林弥栄監修
- 『山溪ハンディ図鑑4 樹に咲く花 離弁花2』 山と溪谷社
- 『葉っぱ・花・樹皮でわかる樹木図鑑』 池田書店
- 『緑の侵入者たち 帰化植物のはなし』 浅井康宏著 朝日選書
- 『山溪ハンディ図鑑5 樹に咲く花 合弁花・単子葉・裸子植物』 山と溪谷社
- 『四季別 花屋さんの花』 金田陽一郎・初代 西東社
- 『山溪ポケット図鑑3 秋の花』 山と溪谷社
- 『草木花歳時記 夏』 朝日新聞社
- 『草木花歳時記 秋』 朝日新聞社
- 引用している図書名のみ記す。

(石川)